

学校現場で大きく変わってきたことをテーマに行った座談会の内容をまとめました

ICTを活用して子どもたちの学びの質を高める

※写真撮影時のみマスクを外してもらいました。

特集 未来の守山を考える

変わる、学校現場

ピックアップ

本市では、地域を表す言葉として「学区」を使っています。「学区」という地域単位からは、市や市民にとって小学校と子どもたちが、とても大切にされてきた伝統を感じる事ができます。卒業から何年、何十年たっても懐かしく、さまざまに思い出が去来する母校は、どう変わっているのか。子どもたちの成長を育む学校現場の「今」を知ることは、新しい視点で守山の未来を考えるきっかけになるのではないのでしょうか。



校庭で元気に遊ぶ児童(物部小学校)

児童生徒の根っこは昔も今も変わらない 社会変化に適応した丁寧な指導が必要

学校現場は社会の縮図ともいわれます。本市では、小学生5,711人、中学生2,782人令和4年5月1日現在が市立9小学校・4中学校で学校生活を送っています。

学校現場の変化

	教職員数	児童生徒数	学級数
平成15年	386	6,706	266
平成20年	498	7,263	271
平成25年	520	8,141	295
平成30年	566	8,587	326
令和4年	616	8,493	334

教育要覧(市教育委員会)より

少子化が社会現象となつて久しい中、本市はこの20年、児童生徒数も教職員数も増加の傾向にあります。しかし、急速な情報技術の発達や核家族化、さらには近年の新型コロナウィルス



大型モニターを使った授業(速野小学校)

感染症対策など、学校に通う児童生徒を取り巻く環境は大きく変わってきました。一方で、次世代を担う子どもたちが人生の大切な時期を過ごす、学校現場の教師は「子どもたちの根っこは昔も今も変わらない」と異口同音に話していました。

県や市は少人数学級制度や教職員の加配制度などを導入して、子どもの指導にあたる人を増やしています。それは、社会や環境の変化に適応しながら、心豊かにたくましく生きる力を身につけてもらうため、一人ひとりの子どもに寄り添った丁寧な指導ができるようにするためです。

「ICTはどのように使うか」が「カギ」

コロナ禍で加速したICTの環境整備

一人一台の端末、それらをつなぐネットワーク(Wi-Fi)整備、各教室にPC充電保管庫、大型モニター。学校現場に導入されているICT環境です。新型コロナウィルス感染症の拡大で、大人から子どもまで、市民生活が一変しました。それは学校現場も同じです。新型コロナウィルス感染症拡大にあつても、子どもたちの学びを止めるわけにはいきません。学校では緊急事態宣言下でも、授業動画を配信したり、不安な子どもをフォローしたりと、できることを

模索する日々が続きました。このような背景の中で、ICT環境の整備も進んでいきました。

ICTを授業に活用 オンラインで家庭とも連携

急速に進んだICT機器の導入に伴い、ICTを活用した授業のニーズも高まりました。中には操作に慣れない教員もいましたが、実際に使ってみることで、ICTの良さや可能性に気が付く姿が見られました。例えば、資料を大型モニターに提示することで、拡大したり、比較したりすることができ、より視覚的にわかりやすくなりました。また、学校と家庭をオン

金田 泰秀さん
(現 速野小学校 教諭)



ラインで結び、それぞれを考えをリアルタイムに共有することが可能になりました。さらには、守山市で導入しているAIドリルに取り組むことで、一人ひとりが理解度に合わせた問題に繰り返しチャレンジできるようにしました。

ICT機器の活用で、今まで不可能だった学習が可能となりました。学校現場の技術革新は、多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない個別最適化された学びや協働的な学びへとつながっています。

学心目的が明確な 授業づくりをする

最近の学校現場では、ICTを活用した授業がたくさん見られるようになりました。でも、大切なことは、ICTを使うこ

とではなく、学心目的が明確な授業づくりをするということです。その点については、昔も今も変わっていません。その上で、学習内容に対して子どもの興味関心をどのように高めると良いか、グループで対話する場面をどこに設定するか、ICTをどのように使っていくかなど、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業をデザインしていくことが求められています。

「学心目的が明確な授業のもとに、ICTは効果的に活用される」。このことを全教員で共有し、子どもたちの学びの質を高めるようにすることが、ICT活用守山モデルです。



ICTを活用した授業(明富中学校)

地石 玲子さん
(学校教育課 参事)



西村 幸太さん
(学校教育課 指導主事)



ピックアップ



児童の環境ボランティア活動(玉津小学校)



地域のボランティアグループによる読み聞かせ(河西小学校)



必須となった外国語授業(吉身小学校)



地域の人を招いた社会科授業(中洲小学校)



中学校給食(守山南中学校)



地域へ出かけて学ぶ校外学習(立入が丘小学校)



市内の事業所で職業体験(守山北中学校)



励まし合い汗を流す部活動(市立守山中学校)

写真グラフィック

子どもたちの笑顔とエネルギーはまちを明るくする

学校現場で大きく変わってきたことをテーマに行った座談会の内容をまとめました

安定した学力を基本にした丁寧な支援が必要

※写真撮影時のみマスクを外してもらいました。

多様な時代の多様な悩みに寄り添う



村上沙代さん (スクールカウンセラー)

学力、生活、心など求められる多様な支援

近年は子どもの不登校が増えています。本市も例外ではありません。そのような場合、学校では放課後登校や別室での個別授業などを経て、徐々に元のクラスに戻っていくようにと考えています。しかし、子ども一人ひとりに違った事情があり、学校の教職員だけでは対応しきれない事案も増えています。

児童生徒の学力や生活、心を支援するために、県や市は多くの教職員を配置しています。福祉分野ではスクールソーシャル

ワーカー、法の分野ではスクールロイヤー(弁護士)、心理の分野ではスクールカウンセラー、学力の分野では体育や算数、理科などで専門の教員を加配して、子どもたちを支援する体制を充実させてきています。

特に本市のスクールカウンセラーは、5年前からフルタイムで子どもたちの支援に当たっています。

時代の変化が子どもにも影響見守る目が減った背景

丁寧な支援の体制が求められる背景には、時代とともに児童生徒を取り巻く環境や社会の変



寺井信哉さん (学校教育課 課長)



木村有真さん (学校教育課 指導主事)

化がありますが、子ども自身が昔と変わってしまったわけではないと思います。

少子化でできるよういや同年代の友達が少ない、外遊びの場所が減ってスマホやゲーム(あるいはインターネット)の遊びが増えました。休日や食事など家族団らんの時間を大切にしている家庭は多いですが、普段は大人も子どもも、とても忙しくしています。

地域の大人や高齢者が「スクールガード」などに取り組み、子どもたちを大切にしてくれませんが、一人の子どもを支え見守る大人の目は、減ってきているように思います。

身近な人に頼る「力」を SOS の出し方教育を実施

リアルな世界がまだ狭い子ども

もには、インターネットなどでのコミュニケーション、予想もしていない危険が潜むことを根気よく教えていく必要があります。子どもたちの「生きる力」とは、何もかも一人で抱えることではありません。身近な人に頼る力、大人になった時に自立して世の中を渡っていく力のことです。学校現場では、中学1年生を対象に「SOSの出し方に関する教育」を実施しています。

力が、学力と相互関係にありま



みんなのために、JRC活動(守山小学校)

ピックアップ

ピックアップ

学校現場で大きく変わってきたことをテーマに行った座談会の内容をまとめました

学校現場で大きく変わってきたことをテーマに行った座談会の内容をまとめました

学校で経験する 学びを生涯の糧に

学校給食は 健康といのちを学ぶ時間

※写真撮影時のみマスクを外してもらいました。

※写真撮影時のみマスクを外してもらいました。



向坂 正佳さん
(市教育長)

児童生徒一人ひとりにそれぞれのストーリーがあり、クラスの児童生徒が35人いたら35通りの接し方をします。それは教師として不変の在り方です。
異年齢の子どもたちが地域で一緒に遊ぶ姿を見ることが少なくなり、リアルな人と人とのつながりを経験する機会が減っていると思つことはあります。テレビの見過ぎが問題とされた時代もありましたが、今の子どもたちは、刺激やドキドキだけを求めるような短い動画を見ています。学校では読書を勧めるとして、一つひとつのストーリーを大切に

地域教材で生涯の愛郷を学ぶ
リアルな体験のストーリー

「子は宝」教育理念の根っこは不変



新井 千英さん
(明富中学校 校長)

にすることを教えています。

守山には、地域で学べるものがたくさんあります。市街地のホテルや悠大な琵琶湖、野洲川、文化財、青少年赤十字(JRC)など、児童生徒にとって生涯のアイデンティティや郷土の誇りになるようなさまざまな体験から学ぶことができればと考えています。市内の学校では、以前から環境教育など



小泉 英之さん
(吉身小学校 校長)

現代社会は求められるニーズの多さや環境の変化など、さまざまな要因が重なって、すべての人に余裕がなくなっているように感じます。
学校も団塊世代の教員がこっそり退職した後、人手不足が課題になっていて、今は管理職自らが子どもの前に立って授業をしたり、保護者からの相談をじっくり聴いたり、マルチな動きが求められる時代です。
教師は利益を追求する仕事ではなく、人を育てるといふ見えない誇りややりがいがある仕事です。それだけに大変な面もありますが、しんどい中にも楽しさがあります。教師の熱意ある姿や励ましの言葉で、子どもたちに、「将来、先生になりたい」と思ってもらえる仕事であり続けたいと願っています。

余裕のない大変さも
人を育てる仕事を誇りに

学校で学びがさまざまな経験
地域の宝が教育の理想

今の子どもたちは真面目で



異学年が班と一緒に登校(小津小学校)

リケート、失敗をとて怖がる傾向にあります。学校や家庭が子どもたちに理不尽のないように丁寧を支えています。社会に出れば理不尽と無縁ではないかもしれませんが、レジリエンス(立ち直る力)を育てるのも重要です。
成功体験だけでなく、いい意味の失敗体験も子どもには大事な栄養です。集団活動や地域学習など学校での多くの経験が、命をつなぎ、守り、人と人がつながる力を育ててくれるのではないかと思います。
通学路の危険箇所などの情報を、地域の人からもらうことがあります。学校・家庭・地域、みんなで「気にかけているよ」と、子どもたちに伝える現場が教育の理想ではないでしょうか。

現代に求められる学校給食の役割

市立小中学校で学校給食実施年齢に応じた献立の工夫も

先行の守山南中学校に続き、昨年9月に3中学校でも学校給食が始まり、市立小中学校のすべてで自校方式による学校給食が提供されています。毎日およ



右から植村俊之さん(教育部次長)、竹村直也さん(保健給食係長)、村中健志さん(保健給食課指導主事)

そ小学校6、300食、中学校3、200食を用意しています。学校給食の基本は1汁2菜で、主食、牛乳、おかず2品、汁物

は違いますが、成長期である中学生にとっては、体作りにたくさん栄養が必要で、このため、献立に「鉄分を多く摂れる日」「力



左から大谷絵理子さん(栄養士)、三津屋純子さん(栄養教諭)、成田幸子さん(栄養教諭)

ルシウムを多く摂れる日」などを設けるようにしました。

市民生活や食文化の変化で
学校給食の役割も増している

自校方式の学校給食を導入したのは、温かいものを温かいうちに食べられること、給食室で働く人を身近に感じられることが、食事の大切さを学ぶ「食育」にも良い環境だからです。また、食物アレルギーにも丁寧に対応できる利点があります。

現代では多忙な家庭が増えて、日ごろ手間暇のかかる食事ができない場合もあるので、昼の学校給食で栄養バランスの良い食事をするのが、子どもにも家族にも安心につながるのではないのでしょうか。

これまでの学校給食では主に栄養補助やバランスに重点が置かれていました。現在は、これに加えて「食」って何なのか、「食」を考えたり、「食事を楽しむ」という望ましい食習慣を身につけてもらう貴重な学びの場として、食育を重視しています。そのため「守山の日」「滋賀の日」「全国味めぐりの日」など献立の工夫により、私たちを取り巻く社会環境に目を向けたり、地産地消

を心がけることで郷土守山への理解を深めたりしています。
また、昨今では和食(伝統食)離れが顕著になっていて、今の子どもたちには、ヒジキや煮物などが珍しいようです。和食に親しむ機会にもなればと考えています。

食が支える子どもの体と心
食育の基本は生きる力

食の細かい子どもメニュー表はしっかり見てくれたり、人気メニューの日は給食の時間を楽しみに待つ子が多くいたりします。

食育の基本は、健康を考えて食べる力ができる力、食を選ぶ力を身につけ、あわせて食事はいろいろな人が関わってできていることや他の命をいたいていることなどを学ぶことです。子どもたちには学校給食を通して学習し、将来への力にしてほしいと考えています。

学校給食に携わる職員や栄養士が協力して、高いレベルの給食を維持しながら、「フードロス」にも取り組んでいくため、今後も試行錯誤していきます。